

博士学位論文審査要旨

2021年9月17日

論文題目：自律的な学習意欲を育む教育環境の構築—自律性支援が内発的動機づけに与える影響の新たな視点からの再考—

学位申請者：江 聚名

審査委員：

主査：心理学研究科 教授 田中 あゆみ

副査：心理学研究科 教授 青山 謙二郎

副査：心理学部 准教授 藤村 友美

要旨：

自己決定理論 (Self-determination Theory; Ryan & Deci, 2017)において、内発的動機づけは、学習場面に最も望ましい動機づけであると言われている。内発的動機づけを育む代表的な方法として、教師や親といった重要な他者による自律性支援があげられる。本論文は、教育現場で自律性支援を行う際に直面する問題に焦点をあて、一連の研究から解決方法を検討した。

第2章では、外的要因が内発的動機づけに及ぼす影響における個人特性による違いを検討するために、金銭的報酬と選択の自由という外的要因の影響を取り上げ、因果律志向性という自律性に関する個人特性の調整効果を検討した（研究1）。その結果、自律的志向性の高い人に報酬を与えると、内発的動機づけに有意な影響はなく、逆に自律的志向性の低い人に報酬を与えると内発的動機づけが有意に低下することが示された。また、自律的志向性の高い人に選択の自由を与えると、有能感が有意に上昇した一方で、自律的志向性の低い人に選択の自由を与えると、有能感は低下することを見出した。

第3章では、重要ではない他者による自律性支援の有効性を探るために、日本のTAと、中国の補導員という、高等教育機関におけるサポートスタッフによる自律性支援が、大学生の学習行動やウェルビーイングに与える影響について、縦断的な調査により検討した（研究2）。TAによる自律性支援の変化は、学生のタイムリー・エンゲージメントおよび大学生活満足度の変化と有意な正の関連があり、抑うつ症状の変化と負の関連があることが示された。さらに、これらの関係は心理的欲求充足の変化に媒介されていた。中国の補導員による自律性支援の変化は大学生活満足度の変化と有意な正の直接的な関連が認められた。

第4章ではさらに、人間が装う人工知能を用いて、人工知能による自律性支援の認識可能性と、認識した人工知能による自律性支援を高める方法を検討した（研究3）。参加者が会話の相手がAIであると認知する場合でも、相手による自律性支援を認識することが可能であること、認識したAIによる自律性支援が内発的動機づけに与える影響やそのプロセスは、人間によるものと同様であることが示された。また、AIに人間らしい外見や情動的共感の能力を付与すると、認識した自律性支援の程度が有意に向上することが分かった。

第4章では、自律性支援の効果を評価するための新たな指標として、エージェンティック・エンゲージメント尺度の日本語版 (AES-J) を作成し、妥当性と信頼性を確認した（研究4）。

本論文は、自律的な学習意欲を育む教育環境の構築にむけて、多様かつ新たな角度から自律性支援の影響を検討したもので、教育実践においても意義があるものである。よって、本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2021年9月17日

論文題目：自律的な学習意欲を育む教育環境の構築—自律性支援が内発的動機づけに与える影響の新たな視点からの再考—

学位申請者：江 聚名

審査委員：

主査：心理学研究科 教授 田中 あゆみ

副査：心理学研究科 教授 青山 謙二郎

副査：心理学部 准教授 藤村 友美

要旨：

論文「自律的な学習意欲を育む教育環境の構築—自律性支援が内発的動機づけに与える影響の新たな視点からの再考—」を提出した学位申請者に対する総合試験を、上記審査委員3名が2021年9月17日（金曜日）16時00分より、同志社大学京田辺キャンパス香柏館低層棟105号室において、約2時間にわたり実施した。

総合試験の冒頭で学位申請者は論文の概要を説明し、その後審査委員から、自律性支援による影響プロセスや、研究結果の応用可能性等に関する専門的質疑がなされた。学位申請者の応答はいずれも適切かつ満足できるレベルにあり、本論文の学術的価値が証明され、学位申請者の研究能力が十分であることを確認した。また、本研究の基礎となる教育心理学領域における専門知識および学力を十分に有することも確認した。

語学試験（英語）については、申請者は英文学術誌で2本の英語論文を第一著者として発表しており、論文における文献引用でも数多くの英語論文が網羅されていることから、学位申請者の研究に必要な英語運用能力について十分であると判断した。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目：自律的な学習意欲を育む教育環境の構築—自律性支援が内発的動機づけに与える影響の新たな視点からの再考—

氏名：江聚名

要旨：

これから社会を支える次の世代に求められるのは、確かな学力、豊かな心と健やかな体といった生きる力であり、これを実現するには社会全体が連携し、自律的な学習意欲を育む教育環境を構築することが必要である（中央教育審議会、2017）。自己決定理論（Self-determination Theory: SDT; Deci & Ryan, 2000; Ryan & Deci, 2017）において、動機づけは自律性の程度によって分類され、内発的動機づけは、動機づけの中で自律性の程度が一番高く、学習場面に最も望ましい動機づけであると言われている（Deci & Ryan, 2000）。このような内発的動機づけを育む代表的な方法として、教師や親といった重要な他者による自律性支援が挙げられる（Deci, Eghrari, Patrick & Leone, 1994）。しかし、教育現場における自律性支援の実践は困難である。

本論文は、教育現場で自律性支援を行う際に直面する問題に焦点をあて、解決方法を提案し、検討することを目的とする。具体的には、第一に、外的要因が内発的動機づけに対する影響における個人特性の調整効果を検討すること、第二に、重要な他者以外のものによる自律性支援効果とそのプロセスを解明すること、第三に、自律性支援の効果を評価する新しい指標の日本語版尺度を作成することである。

第2章ではまず、因果律志向性という自律性に関する個人特性を取り上げて、それが金銭的報酬と選択の内発的動機づけへの影響をどのように調整するかについて、実験的に検討した（研究1）。その結果、自律的志向性の高い人に報酬を与えると、内発的動機づけは有意に低下しなかった。これに対して、自律的志向性の低い人に報酬を与えると、内発的動機づけが有意に低下することが示された。また、自律的志向性の高い人に選択の自由を与えると、有能感が有意に上昇した。これに対して、自律的志向性の低い人に選択の自由を与えると、有能感は逆に有意に低下したことが分かった。統制的志向性と動機喪失的志向性による調整効果は確認できなかった。

第3章では、日本のTAと中国の補導員といった高等教育機関におけるサポートスタッフによる自律性支援が、学生の学習行動やウェルビーイングに与える影響について、縦断的な調査を用いて検討した。その結果、TAによる自律性支援の変化は学生のタイムリー・エンゲージメントの変化、大学生活満足度の変化と有意な正の関連性を持ち、抑うつ症状と負の関連性を持つことも示された。さらに、TAによる自律性支援の変化とタイムリー・エンゲージメントの変化や抑うつ症状の変化の関係は、心理的欲求充足の変化に媒介されていることが示された。補導員による自律性支援の変化は大学生活満足度の変化と有意な正の関連性があることも示されたが、その関係は心理的欲求充足の変化に媒介されなかった。

第4章では、まず、人間が人工知能を装って、人工知能による自律性支援の認識可能性と、認識した人工知能による自律性支援を高める方法について、実験的に検討した。また、このような認識した人工知能による自律性支援が、学生の英会話に対する内発的動機づけに与える影響と、その影響における心理的欲求充足の媒介効果について検討した（研究3）。その結果、参加者は会話の相手がAIであると認知する場合でも、相手による自律性支援を認識することが可能であること、認識したAIによる自律性支援が内発的動機づけに与える影響やそのプロセスは、認識した人間による自律性支援の影響やそのプロセスと同様であることが示された。また、AIに人間ら

しい外見や情動的共感の能力を付与すると、認識した AI による自律性支援の程度が有意に向上したことが分かった。その影響はまた心理的欲求を充足し、内発的動機づけに有意な影響を与えることも示された。

第5章では、自律性支援の効果を評価する新しい指標として、エージェンティック・エンゲージメント尺度の日本語版 (AES-J) を作成し、その妥当性と信頼性を検討した (研究4)。その結果、AES-J は原版尺度と同様に1因子構造を持ち、高い内的整合性が備わっていることが示され、再検査信頼性、併存的妥当性も確認された。さらに、AES-J の予測的妥当性を検討した結果、外向性及び社会的望ましさを統制した上でも、ノートの取り方、授業外学習時間、質問頻度はエージェンティック・エンゲージメントという構成概念を直接的に反映すると考えられる変数と関連が見られた。以上の結果から、AES-J は十分な信頼性と妥当性を有する尺度であると考えられる。

以上のように、本論文は内発的動機づけを育てるにおいて、個人特性を考慮する重要性を示した。さらに、サポートスタッフや AI のような、重要な他者以外のものによる自律性支援の効果及びプロセスを明らかにしたこととは、教育現場において、多様な角度から学生を支援するための環境づくりの改善案を明示したと考えられる。本論文で作成したエージェンティック・エンゲージメント尺度の日本語版は、学生の自発的で、教員と共同し、自律的な学習意欲を育む教育環境作りに貢献する行動を最も表現できる概念として期待できるだろう。